

や私たちから、「いっそのこと町名を変更したらどうか」と突拍子もない提案が飛び出し、早速水面下で準備を始めました。当時私は社会教育係長でしたが、総務課の係長、企画調整室の係長の兼務辞令を貰い、密かに町長より町名変更の特命を受けて担当することになりました。その年の町政懇談会のテーマは勿論「町名変更は是か非か」で、日ごろはおとなしい町民性ながら町名変更のメリット・デメリット、賛成意見・反対意見が活発に出ました。町長も町名変更を公約に掲げるようになり、町議会も議論激論の末、わずかの差で町名変更を議決し、県と自治省の手続きをクリアして、官報に双海町から伊予灘町への変更決定の告示が載り、一応の事務手続きを終えました。

ところがそれからいかに町を二分する反対運動が起こり、町長のリコール解職請求のための署名が集まり、町長のリコールが成立したのです。町長は任期を残して辞職し、町名変更の是非を問うため町長選挙に出馬しました。僅差で現職が勝ったものの町長の任期は残任期間の2年で、町名を元の双海町に戻すことにしたものの、結局次の選挙で町名変更反対の候補に敗れ、町名変更騒動は一応の終止符を打ちました。さて町を二分する「町名変更騒動は誰の責任か?」、その責任を取った町長は選挙に敗れて既に離職し、推進事務局長の責務を負っていた私も責任を取らされるような形で全ての職を解かれ、産業課の水産担当係長として左遷にも似た異動が決まりました。その時自責の念に駆られていた私に恩師から、「ぼうふらも人を刺すよな蚊になるまでは泥水すすり浮き沈み」と書いた激励の色紙が届き、感涙にむせびました。

5 村おこし運動

その頃日本国内では村おこし御三家（①特産品開発、②地酒、③太鼓）などに代表される村おこし運動が起こり始めていました。最初に村おこし運動を始めたのは沖縄八重山の青年たちでした。気がつけば若者は中学や高校を出ると働く場所を

求めて東京を目指し、また地価の安さも手伝って土地が東京の資本に買い占められ、過疎と地盤沈下が進みどうしようもない閉塞感が漂っていました。

そんな意識疲弊から脱却し、地域の活性化をしようとする村おこし運動は、大分県大山町の「梅栗作ってハワイへ行こう」や北海道池田町の「ワイン製造による地域づくり」を筆頭に、瞬く間に日本中に広がっていきました。わが双海町も商工会と役場がタッグを組み、色々な補助事業を活用しながら特産品開発を行い、また夏祭りやみなと祭りといった新しい集客イベントも始まって、活気が戻り始めました。時を同じくして愛媛県ではそれらの活動を支援したり、人と情報のネットワークを構築すべく「まちづくりセンター」を設置し、その強力な支援もあって地域づくりの一翼を担うため有志による「えひめ地域づくり研究会」が発足しました。

志を持った人たちが広域的に連携を図る地域づくりの胎動は順調でした。私も地域づくり研究会の立ち上げ時のメンバーとして参画しながら事務局長を務めたり、後に代表運営委員として30年にわたり県内活動を共にしてきました。「酒を呑み（アルコール）、饅頭や漬物（砂糖と塩）を食べ、太鼓を聞くと成人病になる」などと揶揄された村おこし運動は、10年程で一応の終息をみましたが、その後村おこし運動はまちづくり御三家（①人づくり、②シンポジウム、③イベント）として受け継がれ、各地で竹下首相の提唱するふるさと創生1億円などの後押しもあって、巨額の補助事業による文化ホールや運動公園といった身の丈以上の大型施設が県内に次々と誕生しましたが、それらの施設も今では老朽化や低迷する利用率に悩まされながら、その後の平成の大合併による統廃合も進まず、今や負の遺産として頭を悩ませているようです。

6 夕日との出会い

私はアメリカから帰ってすぐに、家の敷地内に